
USELESS

聖

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

USELESS

【Nコード】

N6677X

【作者名】

聖

【あらすじ】

今とは違う歴史を辿った近未来の日本。

内務省の秘密部隊に所属する執行官“楓”は逃走を疑われた執行官“烏”の殺害を命じられる。

“烏”が逃走を図った理由とは？ “楓”は任務を遂行すること
が出来るのか？

ブローグ

とにかく走らなければいけなかった。もしこれ以上スピードを落としたり止まったりすれば秒速約四〇〇メートルで飛んでくる九ミリパラベラム弾が自分の背中にくつものに穴を開けることになる。

——クソ、何がテストだ、ふざけやがって！

彼は自分より五、六十メートル後ろを走っているはずの追手の姿を見ようと振りかえた。見えない。日はとくに沈んでいるし追手は黒い服を来ていたからちよつと振り返ったくらいで見えるはずがないと気付く。だが追手がどんな銃を持っていたかは思い出せる。ただの黒い箱に後から短い銃身と銃把に折りたたみ式の銃床を付けたような無骨な短機関銃、M10短機関銃だ。

彼自身も丸腰ではなかったが、三二発の弾丸をわずか二秒ほどで撃ちつくしてしまうような銃を持った敵と拳銃一丁で対峙するつもりは毛頭なかった。

再び前を向く。何か遮蔽物になるような物はないか探したが彼が見た限りでは見つからない。そもそも遮蔽物なんてないところを走らされているのかもしれない。遮蔽物とはいわない。何か、ちよつとした間を生み出せるきっかけがあればいい。腰に吊った拳銃を抜き、相手に銃口を向けて引き金を絞るまで一秒あれば十分だ。

——賭けてみるしかない。

脚を無理やり止め、体の向きを百八十度変えてその場に仰向けに倒れ込む。

銃声が聞こえた。およそ一秒続いた。数十メートル離れているのに弾丸をばらまいたのでは当たるはずがない。

背中がアスファルトの路面にぶつかるのを感じた。だが首だけはもち上げたまま追手の姿が見えるようにする。反射的に右手が腰に吊った銃の銃把を掴んだ。素早く抜いて照門を覗く。すでにはつきり分かるようになっていた相手の右の鼠径部を狙い、引き金を引く。

拳銃が手の中で跳ねる。間の抜けた銃声が響いた。

当たったのは感触で分かったが上手く鼠径部に当てられたかは分からなかった。相手は動いていたのだから、せめて両手で構えるべきだったと後悔する。

相手がのけ反り、倒れるのを確認すると体を起こして立ちあがる。息がずいぶん荒くなっていた。銃把を握った右手を左手で包み、左手を引つ張るように力を入れる。銃口を倒れた追手に向けながら近づき、どこに弾が当たったのかを見た。

弾は狙ったところよりずっと上、みぞおちの辺りに当たっていた。追手は苦しそうに顔を歪め、呻き声を漏らしていた。構わず追手の握っているM10を蹴飛ばす。短機関銃はあっけなく追手の手から離れた。

蹴飛ばした短機関銃を一瞥すると、追手の額に銃口を向けて二度、引き金を引く。さつきほど拳銃は跳ねなかった。追手の額に二つの穴が開いた。さきほどまで発せられていた呻き声も止まる。死んだと思っただけで間違いはないだろう。

人を殺したというのに、これといって感じることはなかった。人を殺したのはこれが初めてではなかったし、銃などではなくもつと原始的な方法を用いたこともあった。

拳銃をホルスターに収めて大きく息を吐いた。

そこで油断していたのがいけなかった。他にいた敵に全く気付かず接近されていたらしい。

第二の敵は彼の首に腕を巻きつけてあつという間に彼を引き倒してしまった。上半身を捻りなんとか脱しようとするがそうするたびに相手はきつく締め直してくる。

酸素を取り込もうと大きく息を吸ったが上手くいかずせき込むだけだった。

視界がぼんやりしてくると初めて危機感を抱いた。右手をホルスターに伸ばす。普段ならそこから銃を抜いて標的に向けて撃つまで一秒あるかないかといったところで出来る。だが今はいくら手を動

かしても空を切るだけだった。

ばたばたと動かしていた手が段々動かなくなるのを感じながら、彼は意識を失った。

心臓の鼓動が速まり、直腸の辺りがきゅっと締め付けられたような感じになる。緊張しているのだ。散々迷った末に結局セルシンを飲んでこなかったことを楓は後悔した。仕事のたびに飲んでいたのではないつが薬に頼らなければ何もできなくなりそうで嫌だった。

実際には短期間で大量に飲むわけではないのだからそんなことにはならないと分かっていたが薬に頼るのはやはり気が進まない。

黒いセダンのボンネットに腰掛けていた楓は左手でそつと腹をさすりながら右手首に巻いた安っぽい腕時計を見た。

まだ日は昇っておらず、文字盤を認識するなど敵うはずもなかったが短針と長針の先には蛍光塗料が塗ってあったので大体の時間は分かる。

午前三時。

相手はまだ現れない。連絡によれば相手が現れるのは大抵深夜とされていたが。相手が来てしまえば、楓の仕事は遅くとも十分ほどで終わる。もしそれ以上経って終わらないとしたら彼女は死んでいる。

恐いとは思わなかった。それに今死んだとしても悔いなど残らない。自分が置かれている立場で、自分が今生きている世界でやりたいことを見つけないという方が無理な話だ。出来ることなら自分を縛りつけている？施設？を裏切り開放されたいがそれは無理な話だろう。

今それなりの生活ができるのは一応、自分を使っている？施設？のおかげだ。もし裏切れば？施設？は総力を挙げて楓を探し出し、もう実戦では使えないと決めつけて薬品や催眠の実験台にされるのだ。

死ぬことは恐くないが、死ぬすれすれの苦しみを与えられ続けるとなると話は違ってくる。死よりもずっと恐ろしい。

——やっぱりのままでいい。

結局、いつも通りその答えに行きついた。考えるだけ無駄だ。どうすることもできないし何も分からないのだから。それに幼い時から今に至るまでの十数年間、？施設？はずっと自分の面倒を見てきたのだから今さら裏切るというのも申し訳ない気がしてくる。

「何してる！」

自分にかけられたらしい怒鳴り声に楓は顔をあげた。目の前に男が三人立っている。一人は不機嫌そうな顔をした背の低い中年。その斜め後ろに立っていた若い二人はじつと楓を睨みつけていた。三人ともスーツを着ていたが中年のは若い二人よりだいぶ地味だ。

「何してるんだ！」

楓と目が合うなり中年は再び怒鳴る。自分の車のボンネットを知らない人間にベンチ代わりにされていたのだから機嫌が悪いのも仕方がない。

「失礼しました」小さく頭をさげてボンネットから降りる。「ところで、こんな時間まで何を？」

「関係ないだろ」

答えたのは若い二人のうち一人だった。ポケットに入っていた右手を出しながら楓に歩み寄ってくる。ポケットから何が出てくるのか容易に想像できた。

ポケットの中から小さなナイフが姿を現した瞬間、楓は男の右手首を左手で掴んだ。すかさずナイフが握られた手の甲を右手の掌底で叩くと男は呻き声を洩らしながらあっけなくナイフを手放した。手首を掴んだまま男の喉を拳で突き、股間を蹴りあげると男は奇妙

な悲鳴を上げながらその場に崩れ落ちた。

「やめろ！」

もう一人の男がベルトに差していたらしい大きな自動拳銃を抜き銃口を向けた。

——どうせ当てられないくせに。

楓はさも驚いたように目を見開きながら両手を挙げた。

「そのままにしろ！」

興奮しているのか銃把を握る右手が震えている。おそろおそろ楓に近づくと止まる。

敵が反撃できないような丁度いい距離を保てたと満足したのか男の手の震えは治まりつつあった。だが楓にしてみれば反撃は十分可能だ。

挙げていた左手で相手の右手首を掴み右側へ押しやって銃口を逸らし鋭角に折った右腕の肘で男の頬を打った。そのまま右手で拳銃のスライドを掴み百八十度回すようにすると簡単に銃は男の手を離れた。手首を離し奪った銃を持ちかえると右手で男の喉を突きみぞおちを狙って直蹴りを放った。男は体をくの字に折り、せき込みながら倒れた。

「何なんだ、貴様は！」

お抱えのボディガードが倒されて驚いているのか残された中年の男の怒鳴り声には明らかに焦りの色が含まれていた。

楓は中年男を横目に奪った拳銃の弾倉を抜き捨てスライドを引いて薬室の一発も飛ばすと本体も放り投げた。

「何してたんですか、こんな時間に？」中年男のほうに向きなおりわずかに目を細める。「テロリストと資金提供に関する密会でなくて？」

「馬鹿を言つな！ 私は……」

「陸軍参謀本部、主計官、秋山道昭中佐ですね？」

秋山はつと目を見開いた。

「貴様、何者なんだ！」

「内務省ですよ」

楓は小さくつぶやくと腰の右側に吊った自動拳銃を抜き最初の二発を秋山の胸に打ちこんだ。銃をわずかに持ち上げ首に一発、最後に額に一発放つ。

秋山が仰向けに倒れたのを確認すると楓は拳銃のデコッキングレバーを下ろして撃鉄を倒しホルスターに戻した。

これで死んだはずだ。仮に今死んでいなくても助けが来るころには秋山は失血死しているだろう。

相変わらず、人を殺したというのに何も感じない。待っているときはあれほど緊張していたというのに、全て終わってみれば自分でも驚くほど冷静だ。安堵感すら覚える。

スラックスのポケットから黒い携帯電話を取り出し番号を打ち込んで耳にあてた。コール音が二度聞こえ相手が出た音がする。だが向こうからは物音ひとつ聞こえない。

「五階、隊長に繋いで」

楓がそう言っても返事は返ってこない。声紋認証が行われているのだ。

「確認しました。繋がります」

ようやく男が機械的に答えた。再び相手が電話に出る音がする。

「楓です。終わりました」

「分かりました。十二時間後に報告に来てください」

女の声だった。さっきの男に負けなくらい機械的に言うと一方的に切ってしまった。実際に会えばあの女がそれほど無愛想でないことは分かる。電話で話せばそう感じるだけだ。

電話をポケットに戻しちらつと斜め前に視線を向けた。ここからは見えないが歩いて十分ほどのところに小さなビジネスホテルがある。話し合いはそこで行われていた。それを事前に掴んでいた特殊警察は部屋に盗聴器を仕掛けていたから今頃部屋に踏み込んでいるはずだ。そしてここにはテロ組織に金を回していた将校の死体。今朝のニュース番組のトップニュースはこれで充分だろう。

本来であれば殺しなどする必要はなく逮捕すればそれで済むことだ。だが秋山がテロ組織と繋がっていると知った参謀本部は秋山を殺してほしいと頼んできた。そうでなければ参謀本部、ひいては陸軍の面目に関わると判断したからだ。

死体が見つければあとはどうとでも言える。秋山の死体の横には情けない呻き声を漏らしている二人のテロリスト。

彼らは秋山と繋がっていたテログループのメンバーであり秋山が雇っていたボディガードでもあった。実際にはほとんど役に立たなかったうえにこの二人が秋元殺害の実行犯として報道されるだろう。参謀本部の有能な主計官はテロリストによって殺されてしまったがその一方で特殊警察はテログループの壊滅に成功。それでめでたしだ。

深い闇に溶け込むように楓はその場に背を向け歩きだした。

訓練を受け始めたのは十五歳だが、？施設？ではその前から男子のように扱われていた。時々自分の部屋に訪れた男たちは楓に弾丸を抜いた実銃を見せ、操作方法や分解方法を話しながら実際に楓の目の前ではらばらにした拳銃を組み上げた。運動といえば格闘技や射撃だった。アメリカ製やドイツ製の車で来た男はしばしば楓を連れて街まで行き私服の特殊警察官を一目で見つけてみせた。なぜ分かったのか楓が聞くと男は民間人と見分けるポイントを自慢げに語った。

今思えばあれらも楓を男らしくするためのカリキュラムの一環だったのだろう。実際今の彼女は外面も内面も民間人の女性よりは男らしいはずだ。いつからかは覚えていないが一人称には“僕”を用いるようになっていたし服装も男性らしかった。

姿見を見ながら楓は上着の上から腰のホルスターが分からないか確認していた。

毛先をそぎ切りにした短い髪に顔立ちも手伝ってマニッシュというよりは中性的な印象を受ける。着ているダークスーツは上着もワイシャツも右ボタンで黒いネクタイも締めている。睡眠もったしシャワーも浴びたので見苦しくはない。

腕時計を覗いてまだ時間が充分あることを確認すると姿見のすぐ横にあるタンスの一番上、二つ並んだ引き出しのうち一つを開けた。中には弾倉を抜かれた自動拳銃と弾丸の装填された弾倉が収まっている。取り出して弾倉を銃把の底に挿し入れてスライドを引き、初弾を薬室に送り込んだ。銃把の左側にあるレバーを下げると撃鉄が倒れる。

楓が使うSIG/ザウアーP226には安全装置がなくハーフコックポジションまで撃鉄を倒すデコッキングレバーがあるだけだ。このまま引き金を引くだけで初弾が撃てる。

P226をホルスターに収め引き出しを閉めるともう片方の引き出しを開けやはり弾丸が装填された弾倉を二つ取り出して腰の左側に差した。

再び姿見で拳銃が分らないことを確認するとテーブルの上に置かれたイグニッションキーとカードキーをポケットに入れ黒い革力バンを持って部屋を出た。

楓の住居は？施設？が用意した小さな二階建てアパートの二階の一室で下にはごく小さな駐車場がある。狭いが停まっているのは楓の白いレクサスLS250一台だけだ。

運転席に乗り込むがキーは回さない。時計を見るとちょうど二時を指していた。あと一時間。ここから本部までは車で行っても十分ほどこしか掛からない。

シートに浅く腰を掛け直して大きく溜息を吐く。まだ出たくはなかった。外にであれば何か嫌なことが待っているに違いない。その嫌なことが何か自分の大事なものを取って行ってしまいそうで怖かった。大事なもの、といっても楓に思い当たるものはなかった。結局自分にとって大事なものは？

楓は軽く首を振るとイグニツションキーを回した。考えても無駄だ。要するに出たくないだけだ。

車を出し表通りへ向かう。運転しながらでも常に周囲の車や人間をチェックするのは？施設？で受けた訓練のせいですっかり習慣になっっている。車に乗っている間、絶えず神経を鋭く保つことになるがそれも苦にはならない。周囲に集中している間は他のことは考えなくて済むからだ。今から本部に行き、そこで何を言われるかも考えなくていい。それは楓にとって最も魅力的な時間だった。

やがてその時間も終わり目的の建物が見えてくる。

六階建てで横幅の広い造りになっている建物だ。門に社名を出しているわけでもないのによく見れば不審に思う人もいるかもしれない。だが誰もこの建物を注視することなく通り過ぎていく。郊外にあるということも幸いして建物はよく通りに溶け込んでいた。

駐車場にレクサスを停めてキーを抜き時計を見る。まだ時間は四十分ほどある。行くにはまだ早い。

アパートを出るときと同じようにシートに浅くかけ直し目を閉じる。

何もすることのない時間が小さいころから楓は嫌いだ。思考は決まって悪い方向に行き、やがて理由もない劣等感を抱き始めて最後には絶望的な気分になる。そういったことを考えないように努力はしてみたが、結局できなかった。常に誰かの言うことを聞いて動いていけばいい。そう思っていた。

今こうしている間にもすでに思考は妙な方向に向かい始めている。これから上に報告に行つて、その後何を言われるだろうか？

次の指令に関してならいいだろう。すぐにかかれるのであればなおいい。あっさり解放されたら今日の残りは訓練に充てる。一番困るのは上の説教が始まることだ。これといって問題のある行動は起こしていないがなぜか心配になる。

上の話は退屈で、何より自分が説教など聞かされていると思うとやはり劣等感を抱く。

——そんなにプライド高かったっけ？

ふとそんなことを思う。そもそも誰と比べて劣等感など抱くのだろうか？？施設？内でも半ば伝説となっている？桜？や？鳥？と自分とでは比べる気も起きない。それに他の執行官の成績も詳しく知らない。何度か顔を合わせている者にしてもだ。

キーを抜きカバンを持って車を降りた。そろそろ出てもいい時間だろう。

建物に入り、ロビーを見渡した。

やはり受付の男以外誰もいない。ここで——というよりはこの建物で——他の執行官と？偶然？会うといったことはなかった。駐車場には何台か車があつたのだから来ているはずだが会った試しがない。

受付の男に身分証を見せて奥のエレベーターに乗り五階へ向かう。実際エレベーターに乗っている時間など一分もないが楓には長く感じられた。直腸がきゅっと縮むような感じがした。

——セルシンが必要なのはここに来る時かな。

そんな考えがふとよぎったとき扉が開いた。

廊下は長いがこの五階にはトイレと隊長の部屋しかない。廊下を進み部屋の扉をノックする。返事を待たずに扉を開けた。

「失礼します」

口の中で小さくそう言う入り口の正面にある大きな執務机の椅子に座った女性がノートパソコンの画面に注いでいた視線を楓に向けてきた。

二十代後半といったところだろうか。右ボタンのスーツを着ている。髪は黒く長い。美人だが薄情な印象を与える顔立ちだ。

楓は執務机の前に立つとカバンから報告書を綴じた黒い書類挟みを取り出して机の上に置いた。

それを見た女性——及川希はノートパソコンを折り畳むとろくに読む気もないのか挟んであつた報告書をぱらぱらとめくってファイルを閉じた。

「結果は今朝のニュースで確認しました」及川は執務机の前にある横長のソファの方を顎で指した。「色々話もあるから。とりあえず座ってください」

——こつちから伝えたいことは全部そのファイルにあるから早く帰してください。

そんな言葉を楓は呑みこんでソファに座った。

「何かここで言う事は？」

「報告書の通りです。特別に今ここで伝えることはありません」

隊長である及川が報告書を見るたびにそう訊いてくるのが楓には不思議でしかたがなかった。報告書に一部始終が細かく記されているのは知っているはずだ。だが及川はそれを実際に関わった執行官の口から聞きたがる。

楓の言葉を聞いた及川はしばらく黙ったがやがてぽつりと言った。

「楓。？施設？から逃げ出したいと思ったことはありませんか？」

心臓が一瞬止まったかと思った。任務中に楓が考えていたことが全て見透かされていたような気分になる。

「いえ。ありません」

事もなげに言ったが頭の中では既にどうして及川があんなことを聞いてきたのか考え始めていた。

何かのテストだろうか。もしかしたら今までの楓の言葉の中にそういったことを匂わせるようなものがあつたのかもしれない。

だが最近の及川との会話を振り返ってみてもそのようなものは思い当たらない。

及川はちいさく息を吐くと楓を手招きで呼んだ。

「まだ決まったわけではないのですが……」

下唇を噛み、目を伏せた及川の表情はどこか寂しそうだつた。

及川のそのような表情など楓は見たことがなかった。どんなことを見たり聞いたりしても無表情であるのが彼女だと思っていた。

楓が再び執務机の前に立つと及川は机の一番下の引き出しから赤い書類挟みを取り出した。

「四日前から一人の執行官との連絡が取れなくなりました。住居には支給された携帯電話と車両が残されていたことが分かっています」
支給された車両と携帯電話は執行官たちにとって足枷のようなものだ。任務の時以外にもこれらを使っていればどこにいるかはすぐに分かってしまう。携帯電話は電源を切れればいいがそれは禁止されている。それに車両を置いて言ったとなると答えは絞られてくる。
「二つ、やってほしいことがあります」及川は赤い書類挟みを楓の方に押しやった。「彼が今どこにいるのか、どんな状況に置かれているかを確認するのが一つ。そして可能なら彼を連れ戻してくるこ
と。これが二つ目」

「どうして僕が？」

「楓が適任と判断したからです」

「では、もし連れ戻すのが不可能だったら？」

及川は一瞬口をきつく閉じたがすぐにきつぱりと言った。

「殺してください」

楓は赤い書類挟みを手に取った。これでこの任務は楓が遂行するものとなる。

「対象になる執行官のコードは……」

次の瞬間、楓は書類挟みを及川に突き返そうかと考えた。

「？烏？です」

男は黒いアタッシュケースを持って駅の構内に立っていた。無表情を装っているが視線を忙しく動かし、携帯電話を頻繁に覗くのはいかにも怪しい。

あの男で間違いない。最近の電話を盗聴し尾行を続けてきたのだから間違えるはずなかった。さらに言えば、男がこれから何をしようとしていてどんな結果に終わるかも知っている。

男の後ろに近づき、腰の後ろに差してジャケットの裾で隠していたドイツ製のファイティングナイフを抜く。左手で男の口を塞ぎ、右手で持ったナイフを腰の少し上辺りに刺した。

男はくぐもった悲鳴を上げるが構わずにナイフの柄を九十度捻って引き抜く。男は仰向けに倒れ、刺した所からは血が流れ始めている。

これ以上の長居は無用だ。

男の手元を見た。だがそこにあるはずのアタッシュケースはなかった。

そんなことあるはずがない。さっきまで男はしっかり取手を握っていたはずだ。

背後に視線を感じて振り向く。そこに立っていたのはさっき殺したはずの男だった。自販機に寄りかかるようにしていたその男からは緊張の色は全く感じられなかった。手にはやはり黒いアタッシュケースが握られている。

早足で男に歩み寄り、襟を掴む。だが男は表情を変えることも声を上げることもなかった。喉にナイフを突き立てる。できるだけ深く刺し、ゆっくりと柄を回す。

今度こそ、確実に殺したことを確信しナイフを抜こうとしたとき、肩を叩かれた。

その瞬間、胸の中がすつと軽くなったような気がした。誰であれ

この悪夢から自分を逃がしてくれた人間に感謝しなければいけない。そんなことすら考えながら目を開けた。

視界いっぱい真っ白い天井が広がる。ベッドの正面、ちょうど脚を向けている方に窓があり、そこから射す光に思わず目を細める。「あつ、起こしちゃった?」

視線を声のした方に走らせる。ベッドの隣に置いた椅子に座っていた少女が心配そうに覗きこんでくる。

初めて会ったときは、色が白く顔立ちが整っているから少し大人っぽく見えると思ったがそれは表情のないときだけだ。表情を変えれば幼さが出る。髪は黒く肩の辺りまで伸ばしているがレイヤーで所々はねているから余計に幼く見える。

「起こしちゃったね。ごめん」少女、雨宮湊の顔にわずかに笑みが浮かぶ。「でも私がここに来た時に君が寝てたことなんてなかったから」

記憶がはつきりしなかった。昨日のいつから寝ていたのかも思いだせない。昨日の九時ごろにシャワーを浴びたのは覚えているからそれ以降なのは間違いない。もしかしたらその後すぐに眠ってしまったのかもしれない。

ベッドから上体だけ起こす。昨日まで続いていた鈍い頭痛は消えていたが、頭が重く感じられた。何か言おうとしたが言葉が出なかった。話すという動作がひどく面倒に感じる。

「学校、いいのか?」

やっと口から出た言葉はあまり気のきいたものではなかった。だが制服姿の湊を見るとそう訊かずにはいられなくなる。

「私、来るとまづかったかな?」

「違う。心配なんだ。時間ぎりぎりでもここに来るだろ」

「今日は平気。涉、優しいんだね」

—— 涉? 誰だよ涉って。

そう訊こうとする直前に答えがでる。桐原涉。それが自分の本名。すぐ自分の中で訂正する。

——違う。今の本名は？烏？だ。

少し頭が軽くなった気がした。同時にずるずると現実には引き戻されていく。

——ここは敵がアジトとしているホテルの一室。俺はここに監禁されている。

意識したわけでもないのに自然と歯を食い縛り、口を固く結ぶ。

こんな状況に置かれていながら行動を起こすことができないのがもどかしかった。

「今日はどうするの？」湊の声のトーンが少しだけ落ちた。「今日もここに泊まるの？」

「多分そうする。折角伯父さんが良いって言ってくれてるから」

「そう……あつ、電車間に合わなくなるから、もう出るね」

腕時計を覗いた湊が立ちあがった。表情を見るに今日は割と余裕があるらしい。

「待て。湊」扉に向かおうとしていた湊を呼びとめる。言っておきたいことは山ほどあるが一言にまとめた。「気をつけるんだぞ」

湊は返事をするとはなかったが、渉の方に顔を向けて笑顔で頷き、部屋を出て行った。

部屋が静まり返ると大きな溜息が漏れる。考えなければいけないことが憂鬱な気分と共にどっと頭の中に流れ込んでくる。だがいくら考えたとしても、今はただ待つことしかできない。

再び眠れることを微かに期待して、再びベッドに横になり目を閉じた。

事の発端は三カ月ほど前になる。

国内で政治警察としての役割を果たす特殊警察が 列島解放戦線を名乗るテロ組織に関する情報を？施設？に送ってきたのが始ま

りだった。

特殊警察の情報によれば 列島解放戦線 は近いうちに再びテロを起こそうと動き始めたという。

数年ほど前から国内で爆弾テロや銃撃事件を起こしてきた組織と目されており、事件の中で、民間人では入手困難とされる特殊な爆発物や銃器を使用していたことから軍や警察の中に協力者がいることが疑われていた。

「誰が協力者なのか探り出す」

それが？ 烏？ のコードを持つ渉に与えられた任務だった。

本来なら特殊警察が担当することになっていた事をわざわざ持ちこんできたのだから、？ 施設？ のトップである及川希にもそれなりの勝算があったのだろうし十五の時から訓練を受けてきた渉にしてもそれはそこまで難しいことではなかった。既に解放戦線の構成員と思われる何人かの面が割れていたとなればなお更だ。

渉はその中から幹部と目されている雨宮孝司というホテル経営者に絞り込むことにした。

雨宮の周辺人物を調べ、さらにその中からスパイを獲得する。そしてそのスパイを使い、密かに解放戦線に資金を回している人物のヒントを集めさせ、特定に繋げる。

それが渉の計画だった。

カメラを使う監視や尾行、潜入といった手段は最初から無駄だと分かっていた。爆破や銃の乱射といった派手な事件を起こしていながら数年もの間、警察に逮捕されず逃げているような組織だ。リストに載っていた二人、三人を監視し、懐に潜り込んだからといってすぐに資金源には辿り着かないことは分かっていた。それよりもスパイを使い、何気なくヒントを聞きださせ、可能なら盗聴器を設置させる。そういった方法では確実性には欠けるかもしれないが、相手に悟られにくいことを渉は知っていた。監視や潜入を行うのは対象が資金源に確実に繋がると分かったときだ。

ホテルの従業員、ホテルを所有する団体の関係者の中から雨宮に近い四人の男を選び、情報源とした。

微罪を犯すように仕向け、弱みを握り獲得したスパイは長く情報源として動いてくれない。常に身近な人間を裏切っているという罪悪感に付きまとわれ、ひどいときには自殺もする。

そんな風に獲得したスパイを渉は無理やり長く使うつもりはなかった。

——とにかく短期間で決着をつける。

解放戦線がいつテロを起こすのかという具体的な情報はなかったが、そういった計画があるのなら幹部である雨宮が協力者と接触する可能性は非常に高い。

——分はこっちにある。

渉はそう確信していた。

だがスパイを使い始めてわずか一週間でその自信は揺らいだ。スパイの一人、ホテルでフロント係をしていた男が自宅で首を吊って死んだのだ。

いくら無理やり捜査に協力させられた人間がまともな精神状態でいられなくなるとはいえ、死ぬには早すぎる。

渉はこの男に過去一カ月の宿泊名簿と予約客のリストをコピーしてくるよう命じていた。それがいけなかったのだ。

その時はそうとしか考えられなかった。

フロント係の男が死んだことによって捜査状況は一気に変わってしまった。

あの男が四人の中で最も雨宮に近く、宿泊客に関してはあの男が唯一の情報源だった。幹部の中にホテル経営者がいるのであれば、そのホテルで他の幹部や協力者が接触することは十分に考えられる。そういった意味ではあのフロント係が最も重要な情報源だった。

他の三人からは大した情報は得られないことはすでに分かっていた。再び雨宮の周りにいる人間を調べ直す必要があった。雨宮に肉薄できる人間が必要だった。

そこで渉が目を付けたのが、雨宮が二年ほど前に引き取った彼の姪、雨宮湊だった。

まだ十七歳の少女に自分の伯父がテロ組織の一員だなんて分かるはずがない。そんな人間をスパイにすることが苦肉の策だということとは分かっていた。だがその時は一人目の有力な情報源に死なれたという事態にひどく動揺し、焦っていたのだ。

雨宮湊の行動を四日間調べ五日目、彼女の下校途中を狙い最初の接触を試みた。ちょうど彼女は駅の掲示板に張られていた思想犯の指名手配の張り紙をぼんやりと眺めていたところだった。

「その人、どんな人が知ってる？」

渉は湊の横に立ち、声をかけた。湊は最初、ひどく驚いたような表情を見せたがすぐに不審を抱いたようなものになる。だが渉は構わずに話を進めた。

「僕ね、週刊誌のライターやってるんだ。そうするとね、自分はこう思うけど他の人はどんな認識をしてるんだろってすごく気になるってくるんだ」

週刊誌の記者などももちろん真つ赤なウソだ。だがいきなり女子高生に「俺は政府機関の人間だ。捜査に協力しろ」などと言うのもまずい。当然ながら、偽造した身分を本当のようにみせる物も用意してあった。

「どんな記事、書いてるんですか？」湊はわずかに声を震わせて訊いた。

「そうだな……例えばこの手配犯のこととか」

「そついうのって、まずくないですか？」

「いや。警察に目をつけられないような、当たり障りないことばっ

かり書いてるから。本当はもつと書きたいことがあるけど。寒い留置所にぶちこまれて、毎日死ぬぎりぎりの拷問を受けるのはごめんだし。そういうこと書いて、パクられて拷問死した人、過去にもいるでしょ」

苦笑いを作り、肩をすくめてみせる。果たして少女はどれほどこちらに気を許してくれるのか？

湊はしばらく手配犯の張り紙の方から渉の方に視線を行ったり来たりさせていたが、やがて渉の方へ視線を戻して口を開いた。

「伯父が時々私にそんな話します」

「へえ。伯父さんが？　どんなこと言うの」

何気なく会話を繋げたが、心の中ではしめたものだと思った。

「まともなことを言おうとしてる人が弾圧されるのはおかしいしそういう人を時に殺してしまうなんておかしい、とか。そんな体制がいつまでも変わらないからテロは起こるんだとか。そんな感じのことです」言い終わり、湊も苦笑いを浮かべた。「こんなこと、私の前以外で話すのは見たことないですけどね」

それはそうだろうね、という言葉はのみこんだ。やはりそうだろう。何年も特殊警察の捜査から逃れている集団の一員なのだ。特定の思想を持っていることを示すような発言は当然避けているしそういった会話にも加わらないはずだ。

「なるほどね。伯父さんとは是非話してみたいな。なら、君はそういう話を聞いてどう思う？　まだ若い人としてさ」

若い人、と自分で言っておきながら気がついた。自分はこの少女と二歳しか離れていない。身なりや振る舞いに気を遣えば年齢や職業などごまかすことは容易い。

「私、ですか？」湊は困ったように眉をひそめた。

「まだ難しい話だった？」

「はい。私は何とも言えません。でも思うんです。逮捕される思想犯も、特殊警察の人も、皆ちゃんとした考えがあるからあそこまでやるのかなって」

一瞬心臓が跳ねあがった気がした。湊の言ったことがあまりにひどいものだったからではない。当たっていたからだ。

テロを起こす思想犯にも、冷酷なやり方で犯人を逮捕する特殊警察官にもそれぞれ使命感のようなものを持っている。

「はぁ……面白いこと言うね。そんなこと言ったのは君が初めてだよ」

——今日はこのくらいかな。

ちらりと構内の時計に目をやり考える。

おそらく組織の人間以外では雨宮にとってこの姪が自分の考えを語る唯一の相手だろう。実行の直前になれば何かが変化する可能性が高い。例えばより過激なことを言うようになるとかだ。

「あつ、そろそろ電車来るな。ならこれ……」自分の本名と携帯電話の番号だけが印刷された名刺を湊に渡す。「こういう仕事してるというんな方面に知り合いができるんだよ。何かの時役に立てるかもしれないから」

それを聞いた湊の顔に再び笑みが浮かぶ。

「本当ですか？　なら警察に知り合いは？」

「警察？　どっちの？」

「治安警察。刑事さんとお巡りさんの方です」

「そっちの方ならいるけど……」

「なら今度、その人の話、聞かせて下さい」

「いいけど……」

どうして、と訊こうとしたが改札口の奥で電車が停まる音がしたのでやめた。電車の時間を気にしていた手前、乗らないわけにはいかない。

「電車、来たみたいだから行くね。話、付き合ってくれてありがとう」

そう言って早足に改札口を通り、席の空いている車両を見つけて乗った。シートに深く腰掛ける。

——本当に大丈夫なのか？

すぐにそんな疑問が浮かんできた。

湊が情報源として機能するかではない。もっと漠然とした不安が生まれたのだ。

一瞬この任務から自分を外してもらおうよう及川に頼もうかと考えた。？施設？がこの件から手を引いたところで特殊警察は困らない。

苦笑いを浮かべながら話す湊の姿が脳裏に浮かんだ。

彼女のことを心配しているのか？ それともこんなことにあの少女を巻き込んでしまったことを後悔しているのだろうか？

そんなはずはないだろう。執行官は自分や他人の危険などに関心が薄い。そういう風に洗脳されているからだ。だから当然のように他人を殺せるし自分が死ぬことも恐れない。

それが分かっているにも湊のことが気にかかった。そして何の脈絡もなく、前に及川が退屈そうに語ったある特殊警察官の話を思い出した。

その警官はある左翼系組織にスパイを作るため、構成員である大学生に接触した。当初は貴重な情報源となってくれたが、やがてその構成員の中に組織を裏切っているという自覚が芽生え、彼は自殺してしまった。構成員の自殺は自分が招いてしまったことだと考えたその警官も良心の呵責に耐えきれず自殺してしまったという話だ。最初聞いたときは、そんなことで死ぬなんて意思の弱い奴、くらいにしか思わなかった。だが今その話は渉の中で妙な恐ろしさを纏っていた。

二度目の接触は相手の方からあった。

湊に声をかけた日から二日たった日の昼ごろ、名刺に書いてあった携帯の番号に電話がかかってきた。

「今日ですけど、今から会えますか？」

ずいぶん簡単に他人を信じるものだと思った。今まで相手にしてきた人間は皆——上司の及川や組んできた執行官も含めて——そう簡単に他人のことを信じたりはしなかった。もちろん渉も相手の言う事——たとえそれが相勤者の言うことであっても——を決して鵜呑みにしてはいけないと言われてきた。

「今から？ まだ学校じゃないの？」

「そうなんですけど……何て言うか……」

「さぼったの？」

「……はい」一瞬間を置いて湊は答えた。

「懐かしいね。僕も昔よくやったよ。目的もないのに抜けて、どうしようもないと映画観に行ったり」

——嘘つけ。

心の中で自分を非難する。早退どころか学校法の定める学校にまともに通った経験がない。

こう言った嘘をぺらぺらと喋る自分がひどく醜い生き物に思えてくる。こんなことはしたくないと思ったのも一度や二度ではないが、そうするよりほかにない。

そのまま電話でどこに行けばいいか訊き、通話を終わらせた。

一瞬、畏かもしれないと思った。もしかしたらそうであってほしいと期待したのかもしれない。

雨宮はすでに何もかも知っていて、湊に嘘を喋らせる。それを渉はすっかり鵜呑みにして及川にはそれをそのまま報告をする。そうすれば湊はこれ以上巻き込まれることはないだろう。その代り、最

悪の場合、 列島解放戦線 のテロ行為を阻止することはできなくなる。

それでもいいかなと思う反面、そんなことあつてはならないとも思う。 いろんなことがあつても危険と判断された思想を持つテロリストを野放しにしてはならないと？施設？から言われてきたせいだ。

小さく首を振りイグニッションキーとカードキーを掴む。 何気なく腰にやった手が止まった。 銃を帯びていない。

ほんの数秒考えた後、そのまま部屋を出た。

「すみません、いきなり電話したりして」

向かいの椅子に座った湊は申し訳なさそうな表情を浮かべていた。湊が指定してきたのは最初に会った駅からすぐ近い場所にあるファミリーストランだった。

時間が微妙なうえに雨という天気のせいもあつて店内の客は多くなかった。

「大丈夫。 案外暇な身だから」

笑顔を作りこともなげに言う。 だが実際には大きな抵抗があつた。人を殺すことに抵抗はないくせに嘘をつくの抵抗がある。 どう考えたつておかしいはずだ。 だがそういったことをするのにいちいち躊躇っているようでは役立たずのレッテルを貼られてしまう。 それも気に入らなかつた。

「それで、今から何かしたいこととかあるの？」

「いえ、特には……」

「そう。 ならどうしようか……」

考える素振りを見せようとしたとき、遠慮がちに湊が口をひらいた。

「あの、この間治安警察に知り合いがいるって言っていましたよね？」

「言ったけど、興味あるの？」

そのような話を湊がしてきた理由の予想は大方ついていた。

「父が、あそこに勤めていたんです」

——やっぱり。

彼女が治安警察のことを話し始めたとなればそこから家族の話に繋がっていくはずだ。当然ながら涉は彼女の父親のことも知っていたし、どんな成績を修めて、今どうなっているかも知っている。

あと少し。あと少しで雨宮まで辿り着ける。

「勤めて、いた？」

「はい。私が十二歳の時に殉職しましたから」

「十二歳の時。そう……」

気まずい沈黙を予想していたが、予想に反して湊は口を開いた。その顔には微かだが笑顔すら浮かんでいる。

「父は二十年間あそこに勤めて、十二人の犯罪者を射殺しました。良い大学出て、キャリアで入ることもできたのにそうしないで、昇進試験もほとんど受けないで。結局どうしたかったのかなって。そんなに価値のある仕事だったのかって思うんです」

言葉を失ったのは涉だった。何を言ったらいいか分からない。

今までだったら当たり障りのないことを言って聞き流してしまっていただろう。だがそれができなかった。言葉を間違えてしまえば湊の笑顔は簡単に消えてしまいそうだった。それが嫌だった。

——どうして？

こんなことは初めてだ。情報源に気を遣うことなどなかった。年齢が近いから？ 生い立ちに目が行ったから？

違う。いつだって相手の生い立ちはしっかりと見てきたはずだ。

嫉妬すら覚えるほど裕福な生活を送ってきた者なのであっても。

「あの……」どれほど黙っていたのかは分からなかったが、湊が耐えかねたらしく口を開いた。「もしかして、気分悪くしちゃいました？」

「いや。大丈夫。ただ、その……何て言ったらいいか思いつかなくて」

「すいません。いきなりこんな話されても困りますよね」

苦笑いを浮かべながら湊が謝っているのを聞きながら、頭の別の部分ではもし本当のことを渉が全て話したら、彼女はどんな顔をするだろうと考えていた。はっと気付く。ただ考えていただけではない。微かだが、その考えの下には実行に移そうとする意思があった。

——おかしい。こんなこと、あつてはならないはずだろ？

そう思うほどに焦りが生まれる。なぜ焦っているのかも分からなくなってくる。ただ分かるのはいつもと違うということだけだ。

湊はまだ何か喋っているが内容などほとんど頭に入ってこない。頭の中では何が普段と違うのか考えるだけで精一杯だった。

意識したわけでもなかったのに大きな溜息が漏れた。ふわふわと浮きあがっていた意識が戻ってきたような気がした。

溜息を聞いたせいかな湊は再び黙っていた。心配そうな表情で渉の瞳を覗こうとしている。

「大丈夫ですか？ 具合悪そうですけど」

心臓が大きく跳ねる。湊の前で作り続けていた表情が崩れていたかと思った。違う。本当に崩れていたらもっと驚くはずだ。

「平気、平気。大丈夫」逃げるように窓の外に視線を逸らした。雨は渉がここに着いた時より激しくなっている。「雨、すごいね」

「本当だ。すごいですね」窓の方を向いた湊が心配そうに呟いた。

「こんなすぐくて帰れるかな」

「大丈夫？ ダメそうなら送っていくよ」

「え？ でも悪くないですか？」

「いいよ。こんな雨の中で女の子を一人で帰らすような非人道的なことはできないから」

伝票を掴んでふっと笑ってみせる。違う。笑ってみせたのではなく笑ったのだ。無意識とはいえ、笑顔を作るのと実際に笑うのでは全く違う。

少女の心配そうな顔を見ると、笑いかけて大丈夫だと伝えずにはいられなくなる。

会計を済ませて外へ出ると、早足で渉の黒いクーペが止めてある

場所まで行く。助手席に湊を座らせて自分も運転席に乗り込む。小さく息を吐いた。

「これ、ベンツですよ。」 渉の方へ顔を向けた湊が訊いてくる。

「そう。C180クーペ。車、好き？」

「いえ。特別好きというわけではないですが、伯父の車もベンツなので。」

好機だ。イグニッションキーに掛けようとしていた手が止まる。

「伯父さん？ そう言えばこの前も伯父さんの話してたよね。どんな仕事なさってるの？」

「えっと、ホテル・マネージャーって言うのかな」

—— 上手くいった。

「へえ、ホテル。どんなお客さんが来るかとか、そういう話する？」
「あまりしません。でもよく利用するのかなって方と電話で話しています」

「どうして相手の方がよく利用する人だっと思うの？」

「何時、何人くらいで行くって内容の話をしてますから」

相づちを打ちながらイグニッションキーを回す。頭の中では既に次はどんな行動に移るべきか考えていた。

形はどうであれ盗聴器を使いたいが一人では厳しいし、どの電話が使われているかも分からないならやめるべきだろう。

車を出すとすぐに会話は途切れた。他にも考えなければいけないことはあったが、意識は隣に座る湊に向いてしまう。

普段は涼しそうな顔をしているが笑ったりすればあどけなく見える。美人の部類に入るはずだ。性格は？ 恐らく素直で真面目といったところか。集団の中では好かれないタイプだろう。

今までこのような人間と接してきたことがあっただろうか？ なかっただろう。彼らの言葉の裏には必ず嘘が見え隠れしていた。なら湊の言葉は信じられるのか？ 自分は彼女に何か期待しているのではないか？

「君は、その……」 言葉が思うように出てこなかったが構わずに続

ける。「どうしてもう一度僕と会う気になったの？」

湊がまた渉の方へ顔を向ける。その瞳からどうしてそのようなことを訊くのかという疑問の色が見て取れた。

「だって前に僕が言ったことだって嘘かもしれないでしょ。その、もし僕が悪い人だったらどうするの？」

ずいぶん曖昧な言い方をしたと思う。やはり湊は苦笑いを浮かべていた。

「そうですね。私には確かめられません。でも、桐原さんって悪い人ではないですよ。きっと正義感の強い方だと思います。そうではないと、伯父と同じようなことなんて言わないと思います。それに記者の方なら面白い話聞けるかなって」

「へえ、そう思う。よく見てたね」

——正義感が強い？ 俺が？

渉の顔を不思議そうに見ていた湊が首をかしげる。

「私、変なこと言いました？」

「いや。そういうことではないけど」

一瞬思い留まる。伝えたいことが、訊きたいことがあるのだがはっきりしない。何か彼女に期待しているが何か分からない。

先ほどファミリーストランで考えていたことが再び頭に浮かんでくる。

——もし俺が、自分は内務省秘密機関の人間だと言ったら湊はどんな顔をするだろうか？

さすがに湊もそのような作り話じみたことなど信じないだろう。

当然だが？施設？のことを他人に話すのは固く禁じられている。

徹底した機密保持のおかげで？施設？の存在は創設から二十年たった今も民間人には知られていない。国の中枢においても知る者は少数で、そのほとんどは内務省の官僚や特殊、治安警察の幹部、陸軍の高級将校だ。

ひた隠しにしてきた組織の存在がばれてしまうかもしれないなどという危険を冒せるはずがない。

「君は……」

やめておけ、と心の中で警報が鳴っている。これ以上訊けば湊が情報源以上のものに見えてしまう気がした。

だが警報に従うことはできなかった。

「どんな人だったら信じられる？」

顔を向けていた湊がわずかに俯き眉をひそめたのが分かった。

いきなり妙なことを訊いたものだから不審に思ったのか、それとも本気で考えているのか考える気にはならなかった。

しばらくして湊は顔を上げた。その顔にはなんの表情も浮かんでいなかった。

「分かりません」

湊がどのような答えを言うか予想していたわけではなかった。だが少なくとも、分からないなどと答えるとは思っていなかった。

思わず訊き返すと湊は表情を変えないまま答える。

「はい。分かりません。どんな人を本当に信じたらいいかなんて分かりません。色んな人が私や他の人に嘘を吐くのをしているうちに、どんな人を信じたらいいか分からなくなりました」

「そう。他の子たちもそんな風に思ってるの？」

「他はどうか分かりません」湊が声をわずかに低くした。「桐原さんはどうですか？」

「どうって何が？」

無理にごまかしながらどうしたらいいものか考える。

湊があのように冷めたことを言うとは思っていなかった。もしかしたら涉がそんな答えは聞きたくなかったただけなのかもしれない。何か期待していたものがあつたはずなのだ。

——さっきから俺は何を期待している？

すでに答えは出ていた。ただその答えが認められずに否定し続けていただけだった。おそらく、もうしばらくは続けなければいけないだろう。

「私は、大切にしたいと思っている人が嘘なんて吐いてほしくない

と思っています。私にも、私以外の人にも。そんな正直な人いないって分かっているのに、どうしてもそういう人を探してしまうんです」

耳を塞いでしまいたくなった。もうこれ以上聞きたくない。これ以上聞けば本当に嘘を吐くこと自体が大きなストレスになりそうだった。そんなことになれば役立たずのレッテルを貼られるのは確かだ。

「ごめんなさい。こんな話、迷惑ですよね」

「そんなことないよ。大丈夫。でもね、嘘を吐くという選択しかできない時っていうのはどんな人にもたくさんあると思う。それに一人を騙すことで他の多くを助けられる時もある。自分が助かる時もある。君だって胸を張って嘘を吐いたことなどないとは言えないじゃないか？」

自分は一体何を言っているのだという疑問が浮かんでくる。

嘘を吐くということが気に入らないと思うことはあっても無理に正当化させようとすることはなかった。しようと思わなかった。

「なら、信じていい人なんていないってことですか？」語尾を少しくつくして訊く。「伯父さんは、私を引き取ったばかりのころよく言っていました。私だけでなく、他の人に対しても正直でいられる人を探せって」

そんな人いるはずないだろう。そんな言葉が浮かんできたが、呑みこんだ。湊に言うべきことではない。それに言わなくともいづれ分かることだ。

「それは違うと思う。そういう悪い部分を認めてあげること信じることだと思う」

それを聞いた湊はそうですか、と曖昧な返事をして黙りこんだ。

結局湊は彼女が降ろしてほしいといったコンビニに着くまで黙ったままだった。

「本当にここでもいいの？」

雨はすっかりやみ、太陽が照りつけている。

「はい。ありがとうございます」湊は先ほどの態度からは考えられないような明るい笑顔を浮かべていた。「面倒な話ばかりですいませんでした。伯父さん以外に私の話を真面目に聞いてくれる人、あんまりいないから甘えちゃったのかもしれませんが。それで無茶なこと言ってしまったんです」

きつとあのような笑顔を浮かべているのが本来の彼女なのだろう。本当に正義感が強いのは湊なのかもしれない。ドアを開け、降りる間際に湊は振り返った。

「ありがとうございます。私、桐原さんなら本当に信じてもいいかなって思いました」

また電話しますね、と言い残して去って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6677x/>

USELESS

2012年1月5日02時47分発行